

平成29年度第1回山梨県スポーツ推進審議会
会議録

1 日時 平成29年10月27日(金)14時00分～15時15分

2 場所 山梨県庁防災新館 3階 教育委員会室

3 出席者

(1) 委員 13名

秋山知子、飯田忠子、岩波輝明、大崎恵介、川上琴美、小林仁、佐野夢加、
鈴木昌則、仙洞田茂雄、武井多加志、土屋ひとみ、中村和彦、萩原智子

(2) 教育委員会事務局

スポーツ健康課長、総括課長補佐、主幹、課長補佐5人、国体推進室室長補佐1人

4 傍聴者等の数 なし

5 会議次第

委嘱・任命式

(1) 開会

(2) 委嘱状・任命書の交付

(3) 課長あいさつ

(4) 閉会

第1回審議会

(1) 開会

(2) 会長・副会長の選任

(3) 会長あいさつ

(4) 議事

(5) 閉会

6 議題

[報告事項]

子どもの体力向上について(資料1)

「やまなしスポーツ推進プログラム」について(資料2)

[その他]

第72回国民体育大会「笑顔つなぐえひめ国体」の結果について(資料3)

第73回国民体育大会冬季大会、高校総体スケート競技の開催について(資料4)

7 議事の概要

(議長)

報告事項1の子ども体力向上について、報告する。

(事務局)

子どもの体力向上について、資料1に基づき、説明。

(委員)

目指せ やまなしチャンピオンのところで、県内全小学校参加可能となっているが、これは全学校が入っているのか。それとも可能校だけという意味か。

(事務局)

全学校が参加校ということである。

(委員)

目指せ やまなしチャンピオンで学校に主体的に参加してもらおうということだが、県として参加に向けての取り組みや仕掛けは行っているのか。

(事務局)

今年度から始めた事業で、現在までのところ22校での取り組みである。各担当の指導主事を通して学校の体育先生方に取り組んでもらうようにすることと、来年度に向けて、健康・体力づくり一校一実践運動と組み合わせながら取り組んでもらえるようにしていきたい。

(議長)

報告事項2の「やまなしスポーツ推進プログラム」について、報告する。

(事務局)

やまなしスポーツ推進プログラムについて、資料2に基づき、説明。

(委員)

1ページの進捗について、進捗率はどのように算定しているのか。

(事務局)

1ページの一番上で言うと、30年度の目標の65%を達成するには、あと33.3%必要ということ。25年度の現状値が59.3%だったので、30年度の目標値の65%まで上げるのに、28年度の実績値57.4%だと33.3%下がっているということ。

(委員)

1 ページの No. 2 の朝食のところも下がっているということか。

(事務局)

25 年度の現状よりも、28 年度は下がっているということ。

(議長)

その他 1 の第 72 回国民体育大会「笑顔つなぐえひめ国体」の結果について、説明する。

(事務局)

「笑顔つなぐえひめ国体」の結果について、資料 3 に基づき、説明。

(委員)

この内容とは離れるかもしれないが、富士河口湖町でも独自に、ジュニアアスリートの育成のため、来年度の予算が取れば、町からトップアスリートを発掘しようという事業を考えている。

先ほど話があったカヌー競技の藤嶋も町役場職員であり、総合型スポーツクラブのクラブ富士山もかわりながら活動していく予定である。

(議長)

その他 2 の第 73 回国民体育大会冬季大会、高校総体スケート競技会の開催について、説明する。

(事務局)

第 73 回国民体育大会冬季大会、高校総体スケート競技会の開催について、資料 4 に基づき、説明。

(議長)

報告事項、その他の事項以外で質問、意見等があればお願いしたい。

(委員)

先ほど、報告事項のあったことについて、3 点ほど意見ををお願いしたい。

1 点目が子どもの体力向上のところ、運動する子としない子については毎年調査をするときに問題になることで、2 極化をどう解消するかということが課題になる。つまり、運動していない子がどうしたら運動するようになるのかということが課題である。

その解決には、それなりの器(うつわ)が必要ではないかと思っている。競技スポーツを指向する子どももいるが、昔の子どもが体を使って遊んでいたように、おもしろく

運動したいという子どももいる。そういった子どもにどのような器（うつわ）をどうやってつくっていくかが大事かと思う。

2点目として、運動している子どもも問題になるということである。

最近、運動している子どもが運動を持ち越しているかという研究が流行っている。子供のころ運動していた人が、大人になっても運動しているかということである。ポイントは運動したかしなかったかということではなく、体を使って運動することがどれだけおもしろいと思ったか、あるいは居心地が良いと思ったか、あるいは自らできたかということが大人になっても運動するかしないかを定める要素になるという研究成果がある。子供のころの運動のあり方について、小学校から高校までの体育の授業研究の成果を、地域のスポーツや学校の昼休みや休み時間の体育的活動の中にどのように生かしていくのか。学校でおもしろい授業をたくさん行っていることと思うが、それを反映する場をつくるということも大事である。つまり、運動している子どもが、自分のやっていることに能動的になってくる、おもしろさを感じてくるということが大事である。

最後の3点目に、文部科学省の体育の学習指導要領作成のワーキンググループに入っていたが、今回の学習指導要領の改訂で、小学校1, 2年生の体育の各領域名は「あそび」という名前に統一した。このあそびという概念は、保育園や幼稚園のあそびと全く同じ概念である。発達段階に見合っただけ子どもたちの運動を提示していくことは大事である。学校体育でやっていることと、ひょっとすると地域スポーツでやっていること、あるいは民間クラブでやっていることは、ちょっと誤差があるのではないかと感じている。そういったことに子どもたちは矛盾を感じているという調査結果もあるので、そういったことの是正も非常に大事なのではないかと感じる。

先ほど説明された今のスポーツ推進プログラムの中で、ライフステージという言葉を使っている。9月にスポーツ庁が健康スポーツ部会という新しい審議会を発足したが、そこで子どものスポーツの推進、成人期のスポーツの推進、高齢者スポーツの推進、障がい者スポーツの推進などの4つの部会に分けていた。これに対して、私はナンセンスだと発言した。このようにバラバラにしてしまうと、ほんとうの意味のスポーツ推進にはならない。政策目標としていいが、具体的なスポーツ推進の中身は、運動しながら、子どもにどういった体験をしていると、大人になってから運動をするのか。高齢者で運動している方は、過去を振り返るとどういった運動をしていたのか。障がい者はどうなのかというようなことを、トータルで山梨のスポーツ推進を考えてほしい。

山梨から発信する新しいライフステージに応じたスポーツ推進プログラムをつくっていただきたい。そのために協力させていただきたい。

(議長)

ただ今の意見や各委員の意見を新しい推進プログラムの中に反映して、新しい計画を作成してほしい。

(委員)

栄養教諭であった立場から食育とスポーツの両輪で健康を支えるということを小中学校で取り組んでいるが、この資料の数値を見るとなかなか30年度の目標値には達しないと感じている。

朝食については家庭でのことになるが、学校給食という学校教育に位置付けられた食の時間があるので、食育の面からスポーツや健康に働きかけてほしい。

(委員)

先ほど他の委員から山梨独自の推進プログラムの作成をという発言があったが、それには大賛成なので、文科省、スポーツ庁、体協などで出しているものの良いところだけを取り出してつくるのでは、山梨は全国に遅れるだけだと思う。

スポーツの競技力の向上については、山梨の人口は全国で43番目なのに、国体では今年は30位台に落ちてしまったが、去年は20位台の好成績を出している。それは、他県とは違う独自の強化方法を取っているからである。競技力の向上だけでなく、スポーツの環境整備とか総合型地域スポーツクラブの育成推進等についても、山梨独自のやり方を考えないと生き残りはできないのではないかと懸念している。

総合型地域スポーツクラブの設立や育成については、ずいぶん前から言われてきて、山梨県でもいくつかできたが、市町村がつくって当初は補助金が出ていたのでよかったが、独立採算でやるようになったらしぼんでいってしまったという例もある。子どもの数が少なくなってきて、学校の規模が小さくなってくると高校の部活動でメンバーもいないということも出てきている。野球やサッカーのチームがつかれないという状況になっている。そういう中で、それを補完するのは総合型地域スポーツクラブだと何十年前前から言われてきて、欧米型に変えていくんだと言われてきたが、現在の山梨の状況はどうなっているのか伺いたい。

高校の部活動は文化として残っていくので絶対になくならないと盛んに言っているが、サッカーのクラブチームなんかが出てきて、全国のインターハイは実質的な王者を決める大会ではなくなってくるという状況から考えると、山梨の今後をどういう方向に向けて行くのかを真剣に考えていかなければならない。

子どもの体力向上で、一校一実践運動をやったことで中学生は全国平均を上回ったというが高校はどうだったのか。

(事務局)

高校は、高校2年生の段階で全国平均を上回っている。部活動の関与が大きい。

(委員)

中学校まではがんばっているが高校になると順位が落ちてしまう。山梨県の高校の運

動部の加入率は60%から65%、東京都では25%という現状を考えると、総合型地域スポーツクラブの現状を伺いたい。

(事務局)

資料2の2ページを見てほしい。総合型地域スポーツクラブを設置している市町村の割合が載っているが、28年度は88.9%で27市町村の中で設置しているのが21市町村だった。西桂町が設置したので1町増えたが、それ以外の20市町村は設立準備も含めて長い間変化がない。現在、全く設立に向けて動きのないのが南部町と身延町と早川町の3市町村だが、南部町については、アルカディアという町営の施設を使って総合型地域スポーツクラブ以上のクラブを町営で運営している。総合型地域スポーツクラブは受益者負担ということで独立採算性を求められているが町営なので、総合型町営スポーツクラブとなっている。今のところ、町から切り離す意向はないとのことである。

山梨全体の状況だが、中高校の部活動を補完するような組織はまだまだ厳しい。多くのクラブにかかわっている人たちのボランティアに支えられており、ほとんどは高齢者を対象とした活動が盛んに行われている。特に早川町のように、人口が1000人に対して町の広さがあり、高齢者が多く交通手段がないということで人が集まってクラブを運営するということが難しい。

こうした中、山梨独自の総合型地域スポーツクラブができないかと話し合いをしているところだが、中高校の部活動を補完するような活動までは、現在は発展できていない状況にある。

富士河口湖町のように、子どもからお年寄りまで参加しているクラブ富士山のような理想的な総合型地域スポーツクラブを運営しているところもある。あるいは、北杜市白州町のホワイトウォーターのように、地域に根ざした活動をしているところもある。

一言に総合型地域スポーツクラブといっても、かなり幅広い活動であるということもご理解いただきたい。

(事務局)

多くの貴重なご意見をいただいた。30年度になるが、県の新しいスポーツ推進計画を立てるということになる。先ほど各委員から意見をいただいたが、事務局にとって耳の痛い意見が良い意見だと思っているので、本格的に意見をいただくのは来年度になるが、計画に反映させていきたい。

来年度の計画は、国のスポーツ基本計画を参しゃくしてつくることになっているが、山梨独自のものを考えていかなければ、どこの県も同じ計画になってしまうので、審議会でご意見をいただいて反映することで独自色を出していきたい。来年度は、多くの意見を出していただければ非常にありがたい。

(委員)

身体表現が専門でフィギュアスケートの選手を育ててきたが、来年、山梨で行われる冬季国体に選手を出すには、総合型地域スポーツクラブではできないというのが現状である。

山梨県ではプロのフィギュアスケーターが2名いるが、子どもたちがたくさんの自費を使ってあこがれのスケートをやっているのが現状である。

日本スケート連盟にはフィギュア部、スピード部以外にスケートの底辺拡大を目指して普及部というものがあるが、山梨には指導者がいない。スポーツ少年団や体協にもいない。幼児にも教えられる指導者がいない。学校や保育の時間が終わった後に、リンクや体育館を開放してスケートやスポーツを教えるというような組織を作ろうとしても難しいというのが現状である。

次年度からはそういったことも考えていきたい。

(議長)

来年度は、スポーツ推進計画を一体感をもって立てていきたい。地域をつなぎ、地域を生かし、地域を元気にすることが最高のテーマだと思っている。この審議会を通じて、山梨県のスポーツ計画が県民、市民、町民のための計画となるようお願いをしたい。

(以上)